

研究動向

リベラルアーツの比較研究

中井 章子

本プロジェクトは、比較的・歴史的研究をと
おして、21世紀現代における「教養教育」の理
念と実践に寄与することを目指している。

2012年度から本学は改組し、「現代教養学科」
を発足させた。当学科は、本学が開学以来、国
文・英文・家政・教養・芸術・子ども学科すべ
てをとおして追求してきた教養教育を現代に相
応しい形としてあらためて構想したものである。
21世紀の大学教育において専門性が必要であ
ることは言うまでもないが、それぞれの専門
を生かし発展させていくための全体的歴史的視
野や一人ひとりの個人が一市民として多様な問
題を解決していくための判断力を育て、人間と
して生涯成長し、人生を充実させていくための
教養教育の重要性も見直されている。本プロ
ジェクトは、本学の「教養教育」のための具体
的提言を視野に入れて研究を進めようとしてい
る。

2012年度には、まずヨーロッパ起源の「リベ
ラルアーツ」についての共通理解を深めるため
に、ギリシア、中世ヨーロッパ、ルネサンス、
18世紀の教育思想とその背景にある人間観を検
討した。また、現代に関しては、専門化の中で
の人文と社会科学と自然科学の連携の問題、
大衆化した高等教育における「教養」の問題、
「ジェンダー」と「教養」の問題などを、講演
会とその後の討論をとおして考えた。

2012年度の講演会としては、第一に、木部尚
志氏（政治学、国際基督教大学）による「リベ
ラルアーツと大学教育—ICU からみた現状と
課題」が開催された（2012年7月17日）。木部氏
は学科を廃止し、教養学部のようにデパートメ
ントを置く制度へと改組した国際基督教大学の

実情と問題点を紹介した。第二には、藤本夕衣
氏（教育学、東京大学総合教育研究センター）
による「多文化状況の大学における古典—アメ
リカのリベラル・エデュケーション論を手掛か
りにして—」が開催された（2012年10月16日）。
藤本氏は、従来の教養教育において重視されて
きた「古典」の読書が、多文化状況における価
値観の多様化のなかで揺らいでいるアメリカの
現状を紹介し、その中でなお「古典」を再評価
する必要があるのではないかと述べた。現代の
教養教育において考えるべき重要な論点であろ
う。第三回講演会は、三田村雅子氏（日本文学、
上智大学）による「『源氏物語』と＜古典知＞」
である（2013年1月22日）。三田村氏は、日本文
化史において、『源氏物語』という「古典」が
いかに受容されてきたか、そのことの政治的意
味、ジェンダーの観点などを論じた。この講演
をとおして第二回講演会の「古典」というテー
マを日本という地域の問題に広げて考えること
ができた。

以上のような外部講師による講演とそれを契
機とする議論のほかに、研究員はそれぞれ個別
的な研究をすすめている。

鈴木俊之は「イギリスにおける教養教育」を
テーマとして研究している。イギリスの教育制
度においては、従来、幅広く学習する前期中等
教育段階、2～3科目に絞って学習する後期中等
教育段階を経て、大学では一つの科目を学習す
る、言い換えれば専門教育を行うことになって
いた。しかしながら最近、キングス・カレッジ・
ロンドンやユニバーシティ・カレッジ・ロンド
ンのような有力校において教養教育プログラム
を開始させるなど、大学教育の様相が変化しつ

つある。なぜそのような変化がおきているのかについて、現在調査を行っているところである。

八耳俊文は、「日本と中国の教養教育」をテーマとし、日本と中国の教養教育を科学関連科目の導入史の観点より考察している。2012年度には香川県の三豊中学校（現、観音寺第一高等学校）で明治37年から昭和7年まで30年近く、数学の教鞭を執った中井虎男を対象に、現地調査を行い関連資料を収集した。中国の教養教育としては、1917年に蔡元培（北京大学学長）が近代的な初等・中等教育機関として北京に創設した孔徳学校を取り上げるが、これに関連して『孔徳月刊』第1期（1926年10月）～第13期（1928年4月）の複写資料を入手し、研究をすすめている。

梅垣千尋は、「18世紀イギリスのリベラルアーツと女性」をテーマとしている。イギリスでは、19世紀後半に女子高等教育機関が成立するまで、大学で女性が正式な学生として受け入れられることはなかった。しかし、それまで女性が学問の世界から完全に排除されていたわけではなく、専門的な学問研究の内容をわかりやすく伝える入門書の執筆というかたちで、学問の世界の裾野を広げた女性たちもいた。本研究では、こうした女性たちの活動を「専門的学知」の閉鎖性を乗り越える、開かれた「教養教育」創造の取り組みとしてとらえ返すことで、リベラルアーツと女性の関係を歴史的に考察する。

中井章子は、現代の教養教育を視野に入れつつ、「ドイツ語圏近代のリベラルアーツ」をテーマとしている。ドイツの教育は、日本の旧制高等学校の教養教育や大学のモデルになった。

1810年のベルリン大学設立は大学史において画期的な出来事であるが、その構想、教育をになった人々（フィヒテ、W・フンボルト、シュライアマッハ、ヘーゲルなど）は、18世紀の大学で学び、ドイツ啓蒙主義や、ドイツ観念論や初期ロマン派の思想潮流のなかで「教養」や「人間形成」について思索してきた。18世紀のさまざまなアイディアが19世紀の大学として制度化されるにあたり、抜け落ちていった要素もある。日本は19世紀後半に国際社会に参加し、「富国強兵」や「和魂洋才」などの旗印のもとに「近代化」ないし「西欧化」を図ったために、ヨーロッパの「教養」や「人間形成」を支えるキリスト教的理念を深く理解することを避けてきた面がある。中井は、このような観点から、文献を収集し、資料を読み込んでいるところである。

現代日本の教育のなかで、「教養教育」は、一方では余裕あるエリートを対象とした教育として、他方では世界トップレベルの専門家になるわけではない一般の人々のための大学教育として考えられ、混乱している。自由選択科目が幅広く提供され、語学力を重視するカリキュラムをもつ学部が「教養」を学部名に含んでいたりする。

「教養教育」をたんにカリキュラムの問題としてではなく、高等教育全体の問題として考える必要がある。現代の大学教育において教養教育はいかにあるべきか、「リベラルアーツ」を歴史的に、また多文化状況のなかで比較文化的に考察することを通して、現代日本、また本学の教養教育に寄与することを願って研究をさらにすすめていきたい。